

人生において無駄なこと など何ひとつない

ソプラノ歌手
辰巳真理恵

幼い頃から、医者になろうと思っていた。大好きだった外科医の祖父に、「真理恵ちゃんはきつと白衣が似合うだろうねえ。」と言われ、真っ赤なかわいい聴診器をもらい、幼いわたしはすっかりその気になっていたのです。

もともと歌うことが好きで、中学校ではコーラス部に入部。コンクールへの参加も盛んな部活で、夏休みも冬休みも返上で練習があり、筋トレや校内マラソンと、文化系の中でもいちばん体育系に近い部活だったようです。

大学までエスカレーター式の学校でしたが、高校に入った時には医学部を受験しようと思っていた。とはいえ、父

の影響もあり、演劇や

ミュージカルなどの舞

台に興味をもち始め、

ミュージカル部に入り

ました。そうするうち

に、だんだんとミュー

ジカルの魅力にとりつかれて

いきました。厳しさを知っている

父からは、「この世界はやめたほうがいい。」と言われるのはわかっていました。

でも舞台への憧れを捨てきれず、高校一

年間は予備校に通いつつ部活に明け暮れ

る日々。そんな時に出会ったのが、父も

ストーリーテラーで出演していた、宮本

亜門さん演出のバーンスタイン作曲『キ

格をいただけたと思います。大学生にな

ると、友人たちがサークルにバイトにと

青春を謳歌している中、実は、もう一回、

もう一回、と芸大受験をし、仮面浪人を

続けていたのです。学校の授業を受けつ

つ、講習会や模擬試験などを受け、両親

に認めてもらうため、また自分で決めた

ことのため、精いっぱいがんばったつも

りではありましたが、挑戦は三度とも失

敗に終わりました。そのことを、「無駄

だ。」と吐き捨てる人までいました。ふが

いない自分に対してはもちろん、そう言

われたことに対しても悔しくてしょうが

ありませんでした。

そんな時に、母が言ってくれたひと言。

「人生において無駄なことは、何ひとつ

ないのよ。」

これは、今ではわたしの人生の指標の

一つとなっています。最後まで反対して

いた母からのこの言葉。涙が出ました。

母は「芸能人の娘だから。」と指をささ

れることのないよう、どこへ行っても恥

ずかしくないように、と本当に厳しく育



進路を一八〇度変更し、先生について勉強を始めたのが高二的冬。「芸大に入れるなら認めよう。」と両親からは言われましたが、芸大は現役で入ることのほうが難しい難関校です。当然落ちてしまいました。その年に同時に受けたのが、母校となる東京音楽大学です。短期間の勉強でよく合

てくれました。うるさいなあと思うことはあっても、母には言葉では表せないほど感謝しています。

これからも、父の「自分の好きなことをやる。」という精神の自由さを見習いつつ、「人生、無駄なことは何ひとつない。」という母の言葉を信じて日々精進、日々勉強して、前向きにわたしらしく、夢に向かって進んでいきたいと思っています。



辰巳真理恵

1987年、大阪府生まれ。父は俳優の辰巳琢郎。東京音楽大学声楽科卒業。同大学院修士課程声楽専攻修了。現在はコンサートやオペラへの出演、企画制作の他、TVバラエティー、演劇、ミュージカル、ディナーショーへの出演も精力的にこなしている。二期会オペラ研究所第58期本科在籍中。2013年「魔笛」パパゲーナ役でオペラデビュー。